

# 戦前・戦時中における日本学校図書館職員小史

## History of School Library Staff in Japan before End of World War II

梶谷 純一†

TOMOTANI Junichi

**抄録**：我が国の旧制中学校や高等女学校には、学校図書館に事務職員を置いた例がある。ただ、これは極めて希少なケースであり、知られざる日本学校図書館史の一頁である。本稿は、戦前・戦中期に学校図書館の事務職員を採用した事例を明らかにすると共に、当時における学校図書館の事務分掌上の考え方を紹介する。

**キーワード**：学校図書館 学校図書館事務職員 旧制中学校・高等女学校 学校図書館事務分掌

**Keywords** : School Library, School Library Staff, Junior High School, Duties of the School Library Staff

### 1. はじめに

戦前日本の学校図書館史については、既に幾つもの先行研究がある<sup>1)</sup>。歴史的に見ると、京都市が学校図書館（児童文庫）の先進地であり、1902（明治 35）年に生祥尋常高等小学校に児童文庫が設置され、学校図書館としてかなりの実態を備えていたと考えられている。以後、京都市内の各小学校では、短期間のうちに文庫が設立されたことが知られている<sup>2)</sup>。戦前の小学校では、成城小学校や山形市立男子国民小学校の実践が有名である<sup>3)</sup>。中等学校では、岡山県立第二中学校や、徳島県立三好高等女学校の図書館が研究対象になっている<sup>4)</sup>。

先行研究を概観すると、我が国の学校図書館は、戦後に誕生したのではなく、明治以来の長い歴史があったことが判る。

しかしながら、人的配置に関しては貧弱だったと言わざるを得ない。

大正時代に刊行された今澤慈海らによる『児童図書館の研究』（1918年）には、「中等程度の諸学校で特別に図書館係員を置いてゐるところは数へる位しかない。大抵は一人の教師が之を受持つてゐる。尋常高等の小学校では全然教師が之を受持つてゐる」<sup>5)</sup>とある。

また、草野正名は、『日本学校図書館史概説』（1955年）のなかで、「[戦前の]中等学校の場合、設備の整った図書室があつて、運営の面でもある程度活動しているものもあつたが、多くの中等学校では、教務係の1, 2の教師がその係として管理の責任を負わされるという程度に過ぎなかつたのである」<sup>6)</sup>と述べている。

このように、戦前・戦中期の学校図書館は、教師が係を兼ねるのが一般的であり、学校図書館に事務職員は、置かれなかつたと言つて良い。だが、極めて希少なケースであるが、中学校や高等女学校では、学校図書館に事務職員を置いた例があつた。このことは、知られざる日本学校図書館史の

---

† 徳島県立鳴門高等学校

一頁である。

そこで小論は、戦前・戦中期に学校図書館の事務職員を採用した事例を明らかにする。次いで、当時の学校図書館の事務分掌上の考え方を紹介したい。

## 2. 学校図書館職員の配置事例

### 2.1 徳島県立三好高等女学校の場合

徳島県立三好高等女学校（現・辻高等学校）は、1916（大正5）年に三好郡立実業女学校として開校する。

初代校長の高津半造（前・香川県視学）は、1921（大正10）年2月の父兄会の席上にて、「先ず図書館を設立されたい」と提案。翌年の1月、校内に「婦人図書館」（三好婦人図書館とも称された）を設ける。婦人図書館は、1927（昭和2）年に「優良小図書館」として文部省より表彰される。1929（昭和4）年6月には、地域の寄付を得て、鉄筋コンクリート3階建、図書運搬リフト付の「図書館書庫」を完成させ、世間を驚かせた。書庫が完成した年度の蔵書冊数は、図書が約1万1千冊、雑誌が約570冊であった。

高津校長は、独自の教育思想「三好主義」のもと、婦人の地位向上を目指し、そのための中核施設が婦人図書館であった。

三好高女では、婦人の地位向上は、実力の養成になると考え、卒業後も含めた「持続読書」を強調した。また、生徒には半ば強制的に本を読めと申し渡したという。その熱の入れようは、「校長は学校経営の半分を力を図書館の充実に注いだ」と言われる程である<sup>7)</sup>。

同校では、1923（大正12）年4月、阿佐千代子（前年度卒業生）を「教授助手」として採用、図書館事務を担当させた<sup>8)</sup>。

間宮不二雄（青年図書館員聯盟書記長）は、1927（昭和2）年に婦人図書館を見学し、後年に「〔婦人図書館の〕事務は凡て同校卒業生であった人を専任して一切の仕事を処理させている」<sup>9)</sup>と記している。島村萬舞（同校教諭）も、「授業時の運営は事務の阿佐さん」がその任にあたっていたと戦後記す<sup>10)</sup>。断片的な情報であるが、彼女が婦人図書館で活躍したことが伺えよう。

『中等教育諸学校職員録』によれば、阿佐千代子は、「庶務」の職員として、教職員の一番最後に掲載され、1929（昭和4）年5月までの在籍を確認できる<sup>11)</sup>。

婦人図書館の冊子体目録として、『徳島県立三好高等女学校内婦人図書館分類目録』（1927年）<sup>12)</sup>があるが、彼女の関与は不明である。

なお、阿佐千代子が退職した後の補充は無かったと見られ、1941（昭和16）年11月、婦人図書館を参観した佐藤忠恕（国民精神文化研究所図書館主任）は、「感激すべきもの多々あった」としながらも、専任司書の配置の必要性や、「図書整理をもつと完備され度い」<sup>13)</sup>と述べている。

### 2.2 兵庫県立明石中学校の場合

兵庫県立明石中学校（現・明石高等学校）は、1923（大正12）年に明石市立として誕生し、1929（昭和4）年4月県立に移管された。

明石中学校は、1935（昭和10）年4月28日に「山内記念図書館」を開館している。

同館は、初代校長・山内佐太郎の還暦記念として、「山内先生謝恩記念会」が建築資金を募ったもので、木造平屋建の閲覧室と鉄筋3階建の書庫を誇っていた。開館時の蔵書は、校友会や有志からの寄贈による図書約5,800冊であった<sup>14)</sup>。

「山内記念図書館」は、その規定のなか

で、「専任事務職員一名ヲ置ク、事務員ハ図書館事務一切ヲ担当シ、兼ネテ備品ノ管理ヲ掌ル」<sup>15)</sup>とした。

規定にある専任事務職員は、島田信一が就いた。島田信一の名は、開館当日の「記念図書館贈呈式ニ参列セル主要ナル人々」に見える<sup>16)</sup>。ただ、同校の50周年記念誌によると、島田の着任は、1939(昭和14)年6月とある<sup>17)</sup>。また、『兵庫県学事関係職員録』によると、職名は「教授囑託」であった<sup>18)</sup>。

明石中学校は、『山内記念図書館図書目録』<sup>19)</sup>を編集しているが、島田信一の関与は不明である。

なお、太田重孝(明石中学校第一回卒業生・明石高等学校元教諭)は、記念図書館の運営を「直接の責任者として勤められた司書の島田信一先生に負うところが多い」<sup>20)</sup>と記し、以下の様に評価している。

島田先生は生徒の図書委員を指導し、分類整理、貸出事務はもちろん、図書の修理整理指導等々にいたるまで熱心に運営に当たられた。先生の円満なお人から生徒の信望あついものがあった。

島田信一は、戦後も新制・明石高等学校の「図書」担当職員として、1952(昭和27)年3月まで勤続している<sup>21)</sup>。

### 2.3 東京都立第九中学校の場合

東京都立第九中学校(現・北園高等学校)は、1928(昭和3)年5月の開校である。

都立第九中学校では、初代校長・常田宗七の発願により、昭和御大典及び学校創立を記念するために、図書館創設を決定する。1930(昭和5)年5月5日より仮図書館にて閲覧が開始された。図書館建築は、校友

会の事業として進められ、1933(昭和8)年11月11日落成開館する。

同校の「九中記念文庫」(後に興国文庫とも称した)は、鉄筋の講堂階下を使用し、300人収容可能な閲覧室を設けていた。1933(昭和8)年10月現在の蔵書冊数は、図書約3,400冊、定期刊行物約40種であった<sup>22)</sup>。

記念文庫の「立案運営の一切」を命じられたのは、鳥生芳夫(同校英語教諭)である。彼は、帝国図書館長の松本喜一や加藤宗厚に教えを乞うた他、「FargoのLibrary in the School」を繰り返し読んだという<sup>23)</sup>。

鳥生芳夫が、1934(昭和9)年1月に『図書館雑誌』に著した記事によると、記念文庫の管理運営には、本職を持つ教師12名と図書委員が担当した<sup>24)</sup>。「目録部」の教師5名が、総務会計、注文受入、分類、カード、配架などを担当し、「閲覧部」の教師7名は、閲覧事務、掃除監督、読書会、図書館作業科等を受け持ったという。

鳥生はまた、記事のなかで「図書館の事業は確に片手間仕事では中々出来ない」、「専任の職員が専門の知識技能が絶対的に必要」と述べている。このことから、記事を執筆した時点では、専任職員は配置されていなかったことが伺えよう。

しかし、戦後になって鳥生が執筆した回想には、図書館とは別会計で、「助手」(専任)を一人雇い、「事務的な仕事」をさせていたことが述べられている<sup>25)</sup>。鳥生によれば、「専任の事務職員を一人おいてあったことは非常に有難かった」<sup>26)</sup>という。

この「助手」の氏名は明らではなく、配置期間も不明である。恐らく、『図書館雑誌』記事後の採用であろう。なお、同校編纂の校史では、戦前・戦時中に「司書」は、存在しないことになっている<sup>27)</sup>。

### 3. 学校図書館事務分掌上の考え方

我が国の戦前・戦中期に著された学校図書館の参考書には、学校図書館専門職員の記述は無い。現代で言う「司書教諭」や「学校司書」は、理念上存在しなかったと言って良い。精々、専任職員の必要性を提起するに留まる。

しかし、学校図書館の事務分掌上の考え方には言及されたものがあり、学校図書館職員論の前史として捉えることもできる。

そもそも、戦前・戦中期の学校図書館事務分掌の考え方は、大正末期に刊行された、今澤慈海『図書館経営の理論及実際』(1926年)<sup>28)</sup>が、大きな影響を及ぼしていた。

この本の筆者である今澤慈海は、東京市立図書館の館頭(総責任者)で、「児童図書館の道を示した人」とも称せられる。同書は、彼が文部省図書館職員教習所の講師としての研究などを踏まえたものである<sup>29)</sup>。今澤はまた、1937(昭和12)年12月、東京府中等学校図書館研究会で、「中等学校に於ける図書館経営に就いて」を講演している<sup>30)</sup>。

同書の影響について、滑川道夫(成徳短期大学教授、後の東京教育大学教授)は、成蹊小学校訓導時代、図書館運営の参考にしたと回想している<sup>31)</sup>。鈴木英二(元全国学校図書館協議会編集部長)は、1970(昭和45)年に著した、学校図書館の文献を追った記事のなかで、同書を「名著」と表現する。そして、戦後の時代になっても、「啓培された恵まれた人びともあつたに違いない」<sup>32)</sup>と述べている程である。

『図書館経営の理論及実際』は、「図書館の職員」の章が設けられ、職員の種類を事務分掌上から次の様に分類している<sup>33)</sup>。

- (一) 管理部
  - (イ) 館長
  - (ロ) 各部長或は係長の参加
- (二) 司書部
  - (イ) 目録係
  - (ロ) 註文係
  - (ハ) 受入係
  - (ニ) 蔵書係
  - (ホ) 製本係
  - (ヘ) 閲覧係
  - (ト) 計画及宣伝係
- (三) 書記部
  - (イ) 会計係
  - (ロ) 庶務係
  - (ハ) 建物係

つまり図書館には、館長の下に、「司書部」と「書記部」という二つの部署を置くことによって、図書館の仕事が司書業務と庶務会計業務を区別していたのである。

当時、学校図書館の職員体制は、大規模な図書館と同様に考えられていた。

事実、成城小学校の教師によって著された、浜野重郎・谷口武『児童図書館の経営方法と優良図書目録』(1928年)は、「一般図書館の職員組織ならびに事務分掌の一斑を研究して、それを縮約したものが児童図書館である」と記し、『図書館経営の理論及実際』にある事務分掌上の分類をそのまま掲載している<sup>34)</sup>。

佐藤忠恕が、文部省国民精神文化研究所にて、中等学校教員に講義したものを纏めた『青少年の読書施設』(1943年)も、図書館に「司書部」と「書記部」を置く事務分掌を掲載し、「中等学校の図書館もこれに準じて組織を考へなければならぬ。然らざれば運用が十分に出来ないからである」と説く<sup>35)</sup>。

以上のように、当時の学校図書館事務分掌上の考え方は、司書業務と庶務会計業務を明確に区別していたのである。

例外的な参考書は、乙部泉三郎（県立長野図書館長）の『図書館の実際的経営』（1939年）である。同書の「学校図書館の経営」の章では、「[学校図書館の]係員としては尠くとも一名の専任は望ましい」としつつ、「中等学校の現状は多くの場合、学校教職員等の兼任である」という現実を踏まえ、「司書は教職員、出納手は生徒と云ふ様にしたらよと思ふ」<sup>36)</sup>とあり、「司書部」や「書記部」といった組織を挙げていない。

#### 4. おわりに

本稿では、戦前・戦中期に学校図書館の事務職員を採用した事例を明らかにしてきた。次いで、当時における学校図書館の事務分掌上の考え方を見てきた。

三好高女、都立第九中学校、明石中学校の各図書館に置かれた職員は、どのような性質を持っていたのだろうか。

三好高女の阿佐千代子の場合、彼女が従事したという「事務」や「運営」の具体的内容が判らない。彼女は、図書選択や分類決定、目録作成といった図書館学上の専門業務を行っていた可能性もあるし、庶務会計だけの担当者だったのかも知れない。つまり、『図書館経営の理論及実際』で示された「司書部」の仕事をしていたのか、「書記部」の部分を担当していたのか、はたまた両方を兼ねていたのか不明である。そのため、その性質を判断することはできない。

都立第九中学校の場合、前掲の島生芳夫が執筆した『図書館雑誌』記事によると、係教諭が「司書」をしていた。特に、図書館学上の専門業務は、島生が担当していたと見られる。そのため、「助手」は、それに対

する「事務的な仕事」であった可能性が高い。その意味では、『図書館経営の理論及実際』で示された、事務分掌（司書部と書記部）の体現と言えなくもない。

明石中学の島田信一は、「直接の責任者として勤め」ており、「図書委員を指導し、分類整理、貸出事務」等々の仕事を行っている。在職期間も比較的長く、戦後に跨いで勤務している。彼の立場は、学校図書館専門職としての性質を有していたと考えられよう。

現代の「学校司書」（学校図書館担当職員）の名称は、往々にして資格や知識技術の有無に関係なく、学校図書館を担当している教諭以外の職員に対して広く用いられる。「学校司書」の範囲を広く捉えれば、三好高女の阿佐千代子も都立第九中学の「助手」も、「学校司書」の先駆けである。

ただ、明石中学校の島田信一に関しては、学校図書館専門職員としての「学校司書」の性質を帯びていたと言えるのではないかと

これらの意味で、学校図書館は、決して戦後造られたのではなく、「学校司書」という面においても、戦前から連続していた部分もあった。たとえ、こうした人たちが例外的な存在で、全体から見れば小さな歴史だったとしても、日本学校図書館史の一頁であることは確かである。

#### 注

- 1) 塩見昇『日本学校図書館史』全国学校図書館協議会、1986,211p. 清水正男『わが国における学校図書館発展の研究』ほおずき書籍、1986,431,115p. 国枝裕子『近代日本学校図書館史論』〔国枝裕子〕,2007.（神戸大学博士論文）など。
- 2) 渡邊雄一「児童文庫の設立とその背景について：明治期における京都市小学校の事例から」『佛教大学教育学部学会紀要』7,2008,p.161-172.
- 3) 前掲 1) の文献に加えて、成城小学校について

- は、渡邊雄一「仏教者の図書館観について：沢柳政太郎と成城小学校における図書館教育を中心に」『日本仏教教育学研究』15,2007,p.131-137. 山田泰嗣・渡邊雄一「沢柳政太郎と図書館教育」『教育学部論集』18,2007,p.91-105.
- 4) 大熊圭祐「旧制中等学校における学校図書館：主として人間形成を中心に（その1）（その2）」『操山論叢』6-7,1971-1972,p.21-34・37-50. 拙稿「三好高等女学校『婦人図書館』：学校図書館の先覚者・高津半造」『図書館文化史研究』23,2006,p.53-85.
- 5) 今澤慈海・竹貫直人『児童図書館の研究』博文館,1918,p.151.
- 6) 草野正名『日本学校図書館史概説』理想社,1955,p.133.
- 7) 前掲4), 拙稿「三好高等女学校『婦人図書館』」.
- 8) 「今回文部省より選奨されたる 婦人図書館 徳島県立三好高等女学校内」『図書館雑誌』21(4),1927.4,p.145.
- 9) 間宮不二雄『図書館と人生：間宮不二雄古稀記念』間宮不二雄古稀記念,1960,p.172.
- 10) 島村萬舞の回想は、武田尚夫「三好高女の『婦人図書館』」『学校図書館』301,1975.11,p.60.に収録されている。
- 11) 『中等教育諸学校職員録』中等教科書協会：各年度版。  
なお、『会員名簿 1961』徳島県立辻高等学校同窓会,1961,143p.『辻高同窓会会員名簿 1980』徳島県立辻高等学校同窓会,1980,306p.の旧職員表には、阿佐千代子の名前は無く、卒業生としてのみ掲載されている（西条千代子、旧姓：阿佐、として掲載）。
- 12) 『徳島県立三好高等女学校内婦人図書館分類目録』第1冊（大正15年10月30日現在）：徳島県立三好高等女学校内婦人図書館,1927,115p.
- 13) 佐藤忠恕「三好高等女学校婦人図書館参観記」『図書館雑誌』36(2),1942.7,p.95-97.
- 14) 兵庫県立明石中学校々友会雑誌部『山内記念図書館開館誌』兵庫県立明石中学校々友会,72p. 佐々木賢祐「明石中学校『山内記念図書館』：設立の経緯とその後」『学校図書館』348,1978.10,p.50-56.
- 15) 前掲14),『山内記念図書館開館誌』p.42-43.
- 16) 前掲14),『山内記念図書館開館誌』p.40.なお、同誌の巻頭写真「記念図書館贈呈式ニ参列セル主要ナル人々」のなかに、「島田委員」という男性の姿がある。
- 17) 「明石中明石高旧職員名簿」『自彊50年：創立50周年記念誌』兵庫県立明石高等学校,1973,p.72.なお、「旧職員名簿」『自彊会員名簿』兵庫県立明石中学校兵庫県立明石高等学校同窓会,1953,p.9.によると、島田信一は1949（昭和24）年3月に退職となり、1950（昭和25）年3月に再び採用されている。
- 18) 『兵庫県学事関係職員録』兵庫県教育会：各年度版.島田信一の氏名は、昭和15年度版から確認できる。また、『明中魂』の各巻にある「職員住所録」でも、島田の名前は、1940（昭和15）年の号からである。
- 19) 『山内記念図書館図書目録』3,1937,72p.（明石市立図書館所蔵）なお、第1号、2号は筆者未見。
- 20) 前掲14),佐々木賢祐「明石中学校『山内記念図書館』」p.52.
- 21) 「職員住所録」『明中』1,1947.7,p.4.  
前掲14),佐々木賢祐「明石中学校『山内記念図書館』」p.52.  
前掲17),「明石中明石高旧職員名簿」『自彊50年』p.72.
- 22) 鳥生芳夫「東京府立第九中学記念文庫に就いて」『図書館雑誌』28(1),1934.1,p.14-28,32. 鳥生芳夫「学校図書館歴史以前」教育技術連盟編『学校図書館法による学校図書館の設備と運営』小学館,1954,p.34-36. 鳥生芳夫「戦前の東京の学校図書館」『学校図書館』137,1962.2,p.43-46.
- 23) 前掲22),鳥生「学校図書館歴史以前」p.35. 鳥生「戦前の東京の学校図書館」p.44-45.  
ここで言う、「FargoのLibrary in the School」とは、Lucile F Fargo, *The library in the school*

American Library Association,1930,453p.である。  
ろう。

24) 前掲 22) ,鳥生「東京府立第九中学記念文庫に就いて」 p.16-17.

25) 前掲 22) ,鳥生「戦前の東京の学校図書館」 p.45.

26) 前掲 22) ,鳥生「学校図書館歴史以前」 p.36.

27) 「各科別職員在勤表」『北園四十年史』東京都立北園高等学校,1968,24-31。「職員在勤表」『北園五十年史』東京都立北園高等学校,1978,p.42-51.の「司書」の項。

28) 今澤慈海『図書館経営の理論及実際』叢文閣,1926,656p.なお,1950年に風間書房より改訂増補版が出版されている。

29) 小河内芳子「児童図書館の道を示した人 今沢慈海」石井敦編『図書館を育てた人々 日本編 1』日本図書館協会,1983,p.89-96.

30) 前掲 22) ,鳥生「戦前の東京の学校図書館」 p.43.

31) 滑川道夫「成蹊小学校の読書指導と図書館経営」『学校図書館』341,1979.3,p.51.

32) 鈴木英二「20年間の学図文献」『学校図書館』235,1970.5,p.54.

戦後の暗中模索の時代,学校図書館の運営にあたられた先生方は,いったいどんな本を参考にされたのだろうか。戦前の著作として,今澤慈海著『図書館経営の理論及実際』,田中敬著『図書館学概論』,林清一『図書の受入から配列まで』,弥吉光長著『目録学汎論』,加藤宗厚著『図書分類法要説』などの名著が刊行されていた。だから,なかにはこれらの著作によって啓培された恵まれた人びともあったには違いない。

33) 前掲 28) ,今澤『図書館経営の理論及実際』 p142-165.引用に際しては,行を整えると共に,閲覧係の細部を省略し,英文表記を除いた。

なお同書では,図書館職員の種類を官職上からも分類していて,「館長」,「司書」,「書記」,「附属員」(巡視,出納手,製本職工,印刷職工,館丁,給仕)を挙げている。

34) 浜野重郎・谷口武『児童図書館の経営方法と優

良図書目録』第一出版協会,1928,p.49-51.

なお,同種の参考書に,小林左源治『学校学級児童図書館経営』目黒書店,1928,417p.奥野庄太郎『児童文庫の経営と活用』明治図書,1928,326p.があるが,学校図書館の職員については触れていない。

35) 佐藤忠恕『青少年の読書施設』大日本出版,1943,p.210-211.

36) 乙部泉三郎『図書館の実際的経営』東洋図書,1939,p.268-270.